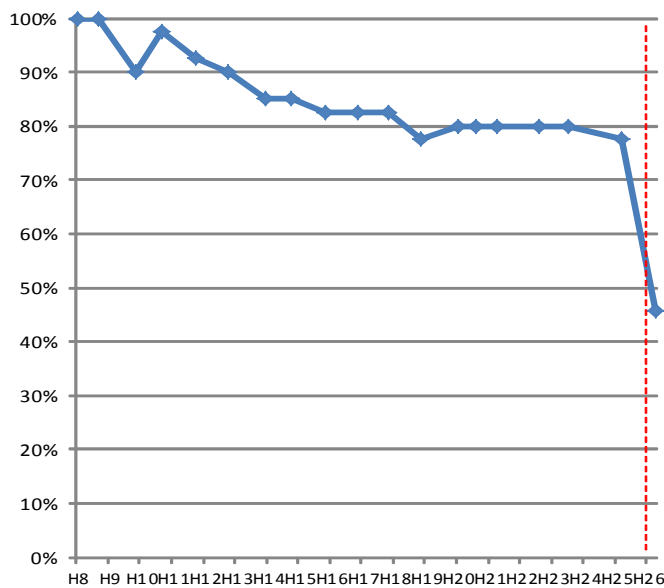


樹種名	ヤマモモ	
科 目	ヤマモモ科	
学 名	<i>Myrica rubra</i>	
分 布	中国大陸や日本を原産とし、暖地に生育し、暑さには強い。日本では関東以南の低地や山地に自生する。本州南部以南では、海岸や低山の乾燥した尾根など、痩せ地で森林を構成する重要樹種である。	
樹木特性	半陰樹であり、低地や山地のやや乾燥した土地に生育する。根粒に窒素固定を行う放線菌の1種であるフランキア (<i>Frankia</i>) を共生させており、やせ地に耐え、比較的耐陰性もあるが、粘土質土壌・排水の悪い湿地では生育不良である。	
用 途	潮害・病虫害に強いいため街路樹、公園樹として利用。実は食用となる。	
植栽本数/面積 (植栽密度)	278 本／0.06ha (5,000 本／ha)	
特 徴	【樹 形】 常緑高木で樹高は 10~15m になり、幹は太くなると灰白色の樹皮に覆われ、多数の楕円形の皮目を持つ。古くなると縦の裂け目がでることが多い。葉は滑らかな縁(全縁)だが、若木では不規則な鋸歯が出る。葉柄は 5~10mm 程度と短い。枝分かれが激しく株立ちのような樹形になる。風圧を受けやすい樹形で根曲木が多い。雌雄異株で、花期は 3 月から 4 月、数珠つなぎに小さな桃色の花弁四枚の目立たない花をつける。6 月ごろに黒赤色の実を結ぶ。果実はほぼ球形で暗赤色、表面に粒状突起を密生する。材は櫛・ボタンなどの器具材、薪炭材、樹皮からはタンニン抽出し大島紬や漁網の染料として利用されたが現在では減少している。現在では、街路樹として公園や街路にも植えられる。殖やし方は接木のほか取り木がある。	  
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。	
被 害	植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生している。 (延べ駆除本数：16 本)	

ヤマモモ 現存率



【現存率】

植栽後にコウモリガやカミキリムシ類による穿孔被害が発生したことから、平成 10 年に補植（30 本）を行った。

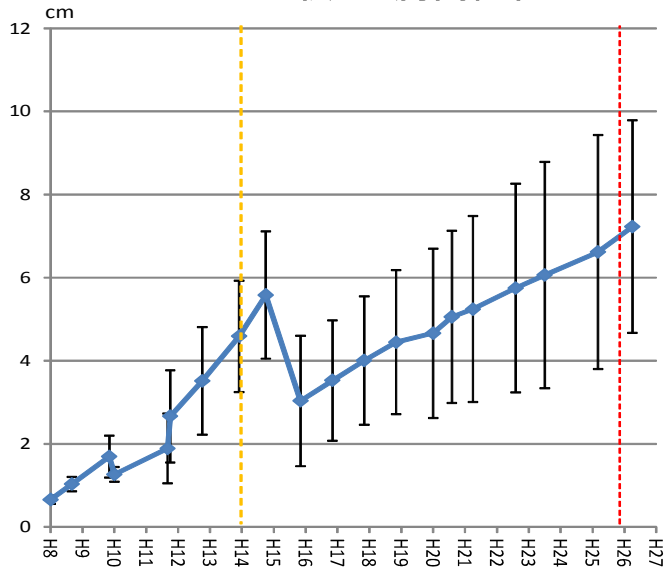
その後、病虫害対策を実施し続け、平成 19 年度からは順調に生育している。

林内の照度調整を図るため平成 24 年度に本数調整伐を実施した。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 45.7%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

ヤマモモ 根元・胸高直径



【根元・胸高直径】

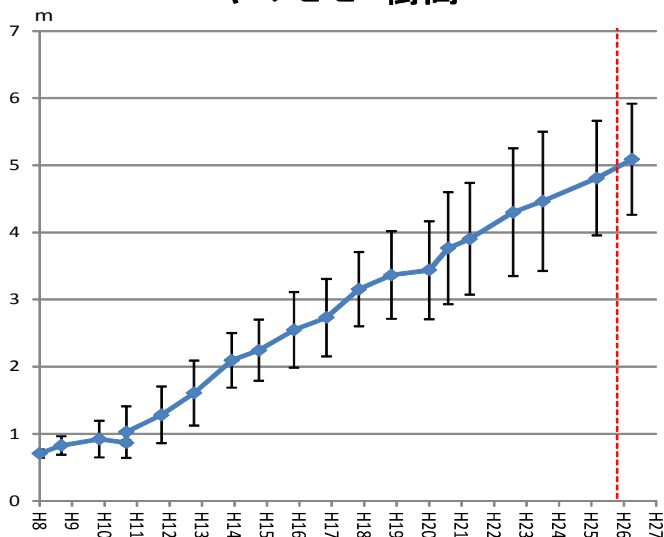
緩やかに成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 7.23 cmであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

ヤマモモ 樹高



【樹 高】

緩やかに成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 5.09mであった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

《プチ情報》

和名の由来は山に生えモモの様な果実をつけることから。別名として楊梅（ようばい）、山桜桃、火実などがあり、古代から和歌などにも詠まれる。

古くは、漁村において、魚の漁獲を保証するために周辺の山に人工林を作っていたとの伝承があり、ヤマモモがよく利用されたという。ヤマモモの実は、鳥などに食べられ、消化された後に発芽する性質がある。そのため、発芽率を上げるには、種子を便所の壺につけておいたとも言われる。

名前にモモがつくがモモはバラ科であり、ヤマモモとモモは全くの別植物である。

樹皮は楊梅皮（ようばいひ）という生薬で、タンニンに富むので止瀉作用がある。消炎作用もあるので筋肉痛や腰痛用の膏薬に配合されることもある。中国から桃が入ってくる前は本種を桃と呼んでいた。果実は甘酸っぱく、生で食べる他、ジャムや果実酒に加工される。